

## ＝＝＝＝ 保育Q & A 「支援のヒント」 ＝＝＝＝

天王みどり学園 加賀谷 勝

### Q：集中して話を聞けるようになる支援

A： 活動に見通しがもてるように視覚的な手がかりを活用する

集中できる時間を少しずつ長くする。

活動場所の刺激を少なくする。(視覚・聴覚刺激を可能な限りシャットアウト！)

聞き取る力が弱い場合は、伝える内容を簡潔に、分かりやすい表現を心掛ける。イラストや写真などを使ってイメージしやすくする。

注意の集中・持続に課題がある場合は、話に集中できる静かな環境を整える。前振り(二つお話をします、大事なお話をします)をして子どもの注意を引き付けてから話す。一つずつ確実に伝える、内容を復唱させて確認する。

ワーキングメモリーが弱い場合は、話す内容を小分けにして伝える、消えない情報(イラストや写真等)で伝える。

クラス全体で子どもが取り組めるゲーム(「落ちた落ちた」「伝言ゲーム」「フルーツバスケット」等)を通して、「聞く」スキルを身に付ける。

### Q：行動をコントロールできるようになる支援

A： 実現可能なルール(約束)を設けて、それを守る経験を増やす。

行動の前後に注目し、原因を取り除く等の予防的対応をする。

できていることをほめる、認める。

イライラしたときの対処法を教える。(数字のカウントアップ・ダウン 深呼吸をする 水を飲む 別室でクールダウン おまじないを唱える等)

※期間を設けて、これまでと違う対応をする。うまくいっていることは続ける、1回でもうまくいったら続ける、2回うまくいかなければ別の方法を考える。

### Q：自分の思いを言葉で伝えられず、手が出てしまう子どもへの支援

A： 適切な表現手段をつくる。(要求・拒否・注目) 要求言語(～したい、～がほしい)

は、一番コミュニケーションをとろうとする気持ちになりやすく、モチベーションが高まる。拒否を表現(いやだ、やめて)できると、自分が苦しみことや友達とのトラブルが減る。注目(こっち見て、これ見て、先生!)を表出できると、何かを壊したり、人や自分を叩いたりする不適切な行動が減っていく。

### Q：単語を言えるようにする支援

A： 理解の方が表現よりも概ね先行する。(理解が表現の約10倍程度)

わがままを許しすぎると言葉ではなく、いつも行動で要求を通そうとする子がいる。発達の方向性は「行動→言語化」である。行動ではなく、言葉やサインなどで表現できるようになることが成長である。わがままと思えることに対しては、たしなめる方がよい。

### Q：一番にこだわる子どもへの支援

A： 一番や勝ち負けで判断するのは、4～5歳レベル、6歳前後となれば道徳が分かり、「ルールを守ることが正しく、人をなぐるのは悪い子」と見なす。一番という結果ではなく、ルールを守ることの方がえらいことを教える。他の子を応援したり、負けた子を慰めるように促す。一緒に遊ぶための態度を身に付ける。

**Q : 泣いて騒ぐ子どもへの支援**

A : 子どもの成長を「泣く」という点で見えていくと、年齢が上がるにつれて泣かなくなる。あるいは泣けなくなるのが普通である。小学校低学年くらいからは、泣くのが恥ずかしくなり、泣く仲間を厭うようにもなる。

赤ちゃんのときには、泣くことが不機嫌を示し、授乳を促すなどの合図でもある。それが自立するにつれて、相手に分かるような言葉で伝えることに置きかわっていくのが発達といえる。

泣く子は、大丈夫といってくれる存在が心になくて、たった一人で解決しようとしている。だから不安が膨れあがり、泣き出す。泣く子には大丈夫だよという声かけをする。

**Q : 場面の变化に応じない子どもへの支援**

A : 場面転換についていけない子の大半は、理解力が概ね1歳代である。用心深い年齢ともいえる。言葉の理解も未熟で、大人の説明もよく分からない時期である。やっていることを見せて安心させる段階でもある。全面的に参加できなくても、今日は2割入れたらよしというように、段階的に慣れさせる発想が必要である。

次の活動が分かる具体物を見せる。

予告する。

**Q : 遊びが続かない子どもへの支援**

A : 反応しやすい子は、次の刺激にも反応してしまい、気持ちがもとの活動に戻らない。(注意の転導) 気が散ることへの注意よりも「今は折り紙だよ」と、取り組むべき内容を伝えた方がよい。注意するとそれに反応してまた気が散る。

刺激に反応しやすい子は、少人数の刺激の少ない環境で課題に取り組ませる時期があった方がよい。

危険行為や乱暴な行為は、大人はやった後に注意するのではなく、やる前に注意・制止する。事前に制止される体験を通して、何らかの行動をする前に、大人に確認するようにする。これが分かってくると、対応は楽になる。

**Q : 乱暴する子どもへの支援**

A : 友達を叩いたり、押したりするのは理由がある。何かをやめてほしかった、やってほしかったのか、何かしら訴えたかったのかもしれない。言葉で表現するのがうまくできなくて手が出てしまうタイプかもしれない。基本的には、子どもの気持ちを受け止めて、少しずつ、自分の気持ちを言葉にする方法を教える

乱暴する子は、人を上下関係で見ていることが多い。自分よりも下の位置だと考えている人から命令されることを拒絶する。

上下関係を越えるのは、役割関係への気付きである。それは3歳児の姿でもある。お手伝い、係仕事などをさせて、役割を分からせていく。人を上下ではなく、役割で見えることを教える。社会は役割関係で成立している。役割ができない子は、園ばかりでなく学校でも問題を起こす。

よい言動に注目して、よい評価を明確に伝え続ける。「元気にあいさつできたね」「よい表情だよ」「よくできたね」「ありがとう」など、肯定的な声をかけて、「認められた」ということが実感できるようにする。そして、もっとこの先生に認めてもらいたいという思いを育てる。(子どもからほめてもらってうれしいと思える先生になること！)

Q : 他の子を噛まないようにする支援

A : 噛む姿が見られるのは、1歳～2歳代の子どもを集団保育する場面が大半である。その年齢で概ね消えていく。その姿が消えていかないのは、子どもによっては、大人が子どもに過剰な期待をかけてしまい、それで大事、大切にかかわってもらった感じがしないのかもしれない。

子どもが噛んだ後には、大人は「かしてというの」「いやとって」と話し、行動ではなく言葉で表現するように教える。日常的に、「そっと、だよ」「大事だからやさしくね」というように、コントロールしながら行動できる力を養う。

Q : ルールを理解させる支援

A : ルールは見えない。だから分かりにくい。「順番に並ぶこと」は見える。だから理解しやすいルールであり、レッスン1といえる。

イラストや写真等を活用して分かるように伝える。

ルールのある簡単なゲームをとおして、体験的に学ぶ。

ルールを守ると、楽しいことがある、できることを学ぶ。

Q : パニックへの対応

A : 潜伏期→動揺期→爆発期→回復期のサイクルに合わせた指導をする。

厳しく叱責したり、優しくなだめたりすることが逆効果になるときがある。優しく接することでその行動が強化されることがある。

〈対応〉

- 1 気持ちを十分受け止めて、落ち着くまで冷静に待つ。落ち着いたら一緒に状況を整理して、どうすべきだったかを考える。
- 2 子どもが落ち着かせる場所を用意する。
- 3 園全体で対処法について考え、共通理解を図る。
- 4 失敗体験（かんしゃくの引き金になる）よりも成功体験を増やし、自信をもたせる。
- 5 原因を取り除く。

(1) 過敏性：音の大きさや触れられ時の感触を私たち以上に強く感じる

(2) こだわり：こだわりを壊されると混乱する

(3) 無理な課題：課題が難しい 要求されていることが分からない 見通しがもてない

(4) 身体的不調：腹痛、歯痛、眠い、空腹

(5) フラッシュバック：過去の嫌な体験を思い出す

注目しない 息抜きができる場所を準備する 感覚過敏に配慮する

Q : 人の物を取ってしまう子どもへの支援

A : 衝動性が強い子は、どんなものに興味を示すかを把握しておく。特定のものでは、本人の手元にいくようにしたり、本人の目につきにくい場所に移動させたりする。誰かが全体を見渡せる位置に立ち、水面下で淡々とトラブルの芽を摘む。

言葉を理解できる子どもには、トラブルを覚えている平静な状態のときに、感情を交えに教える。「かして」「見せて」を教える。あわせて「かして」といったあとに相手の判断を待つことも教える。決定権について誤解をもたないようにする。

おもちゃを使うにあたってチケット制にし、先生にチケットを渡してから自分の手元にそれが来て、その場を離れたら使わなくなったときにはチケットを返すなど、所有権の移動が目に見えるようにしておく。

**Q : コミュニケーション力を高める支援**

【コミュニケーション・スキルのレベル】

- 1 泣いたり、叫んだりの要求（教えるわけではない）
- 2 ジェスチャー（人を連れて行くといった直接行動、指さし、バイバイ等）
- 3 物を使って意思表示（コップを示してジュースがほしい）
- 4 絵カード写真を使う
- 5 文字（話し言葉の習得は困難でも文字カードなら入りやすい子に）
- 6 サイン言語（抽象性が高く理解しにくいのであまり使われないのが現状）
- 7 音声言語

※それぞれのコミュニケーション能力を把握し、必要な子には、音声言語に代替する コミュニケーション手段を選ぶ。

※言葉は母親やその他の身近な大人との親密な関わりの中で発達していく。子どもが 転んだときに母親が「痛かったね。大丈夫 痛い痛い飛んでいけー」の言葉を かけることで、子どもはぼんやりとした身体感覚が「痛い」という言葉に結び付く。

**Q : ものを壊す、投げる子どもへの支援**

A : ものを投げつけたりする段階では、言葉で言い聞かせても行動の修正は難しいので、もので遊ぶのではなく、大型遊具での遊びや、体を動かす遊びをすすめる。

万一投げてしまった場合でも、ほかの子に当たらない場所や向きで遊ばせる必要がある。

言葉が分かる子は、「お友達やものに当てない」「ここなら投げていい」といったルールを示せば守れる場合もある。

無表情か険しい表情で投げているときは、ストレス発散のために投げていることもありこのようなときはルールを守るのは難しいので、他の子どもたちを別の場所に移動させる。ブロックを積み上げる遊びが始まりそうであれば、できるだけ子どもを移動させる。

**Q : いちばん前に並びたがる子どもへの支援**

A : 並び順に席順にこだわる場合は、順番や席順をきちんと決めておき、自由に選べないようにする。順番が決まっていると、並びのルールに従うことのほうがいちばん前に並ぶことより優先順位が高くなる。

**Q : ゲームに負けそうになると勝手にやめてしまう子どもへの支援**

A : 「負けそうでくやしんだよね」というような感情に合った肯定的な言葉で伝えて、気持ちに共感する。悔しいと思う気持ちも大事なことや、「勝つときも負けるときもあるけど、次はどうなるのかな？」とその場の感情だけで終わってしまわないような言葉かけも大切である。

「ゲームを途中でやめてしまっても、ほかの子の邪魔をしないこと」を伝える。これができるようになったら、次に「ゲームをするときは、負けそうになっても最後までする」ことを伝え、ルールを少しずつ変化させていく。負けそうなときに励ましたり、ルールが守れたときはほめて自信につなげる。

**Q : 入学まで必要な力とは？**

A

- |                     |               |
|---------------------|---------------|
| 1 自分の名前と年齢がいえる      | 2 指示に従って行動できる |
| 3 排せつ・着替え・食事が一人でできる | 4 隣の子と話ができる   |
| 5 人の話が聞ける           |               |

Q : 気持ちを切り替える6つのポイント

A

- 1 予告
    - ・チャイムが鳴ったらおしまいだよ あと〇分でおしまい
  - 2 契約（約束）
    - ・チャイムが鳴って片付けができた人だけに〇〇を貸します
  - 3 予測
    - ・時間がきてからだをやめられなくなるんじゃない？ ここで切り上げたら
  - 4 強化
    - ・できたとき、約束を守ったとき、遅れてもよい行動をしたときにほめる
  - 5 言語化
    - ・「もっと遊びたかったのに、よくがまんできたね」と子どもの気持ちを代弁する  
→ 苦しい気持ちを受け止めてもらってガマンするほうが、立ち直りが早い
  - 6 キーワード化
    - ・「まあ、いいや」「しょうがない」「こんなときもあるさ」＝続けたいけどあきらめること、「じゅんばんこ」＝自分がやりたいけど順番を守ること、「ドンマイ、ドンマイ」「次があるさ」＝勝負に負けたときガマンすることなど、キーワードを唱えて、切り替えのきっかけとする
- ※言葉には行動や思考を調整する機能がある

Q : 手先を使う作業が苦手な子どもへの支援

A : 発達段階を把握し、「できること」を見つける。その「できること」を取り入れた活動を用意し、さりげなく遊びの中に取り入れる。

制作が苦手な子どもに対しては、できれば個別に分かりやすい説明や支援をする。できたところをしっかりほめる。小さな進歩を見逃さない。同年齢の子に追いつかせようとしないで、その子の少しずつの成長を見守り、支援する。

Q : 嫌なことがあると自傷行為をする子どもへの支援

A : 自傷行為をやめるようにと行動のみを注意するのでは、満たされない。困ったとき、嫌なときに助けてくれる人がいることを感じ取らせる。（共感しながら抱きしめるだけでも十分なときがある）

子どもの好きなことや安心できるもの、人、時間などを見つける。

強い不安感や不満感をもっていることが多い。何がその子の自傷行為の理由になっているのかという視点で見る。子どもにとって嫌なことがある場合、その思いを自傷行為以外の方法で表現できるようにする。

Q : 自分の思いが通らないと泣く子ども

A : 自分の思いを通すためには泣けばいいという誤学習は防ぐ。まずは気持ちを落ち着かせ、どうしたかったか聞く。話せないときは代弁したり共感したりする。

健気に頑張っているときにほめて自信をもたせる。

Q : 通りすがりの子どもを叩く

A : 行動にはすべて意味がある、理由がある、思いがある。何度注意しても同じことを繰り返すのは、保育者に分かってほしいという思いがあるかもしれない。子どもが何をしたいのか、どんな欲求が満たされないのか、思いを感じ取る。

保育者が子どもの〇〇したいを代弁する、思いを伝える手助けをする。

心にもやもやしたものがあって、理由もなく八つ当たりする場合は、家庭的な背景やこれまでの成長を振り返る。過去にひどい扱いを受けて育った場合は、周囲から認められる経験が必要である。

注意するよりも、正しい関わりかを提示したり、友達とうまくコミュニケーションがとれたりするように支援する。

Q : 靴を反対に履く、服を逆に着る

A : 置き場所に文字やイラスト・写真などで印を付ける、「〇〇さんの後ろ」「上から2番目」等、具体的な言葉で説明する。→視覚化 言語化

視空間認知は形ある物を見る、触れる、動かすことを繰り返すことで発達するので、なぞり、線結び、パズル、ブロックなど。形を区別できる活動を取り入れたり、ボール運動やサーキット運動に取り組んだりする。楽しく！

Q : かんしゃくが強い子ども

A : ダメなものはダメと、厳しく言う、我慢させることも必要。

それ以外に抱きしめたり、代わりの何かを提案することで気持ちをおさめるやり方もある。

かんしゃくの強い子は、わがままよりも、言葉ではうまく表現できない苛立ちがある。その思いを受け止める。「辛いよね」と言って抱きしめることが一つの方法。抱っこしたまま静かな場所に行き、気持ちがおさまるのを待つ。

Q : 「なんで」と繰り返す子ども

A : 知的好奇心が膨らんできた証拠。コミュニケーションを楽しみたい時期なので、ユーモアで気軽に応える。子どもは厳密な知識を聞きたいわけではなく、おしゃべりを楽しみたい。子どもとのやり取りを楽しむ。

Q : ADHD傾向の子どもへの支援

A : よい行動、悪い行動の原則をしっかりとって接する。よい行動をしたときには、大人にほめられる。悪い行動をすれば、叱られる。子どもはこの2つの原則で世の中のしくみを学んでいく。

「叱る」ことはできるだけ少なくする。「どうせ自分はダメな子」と思い込む前に、叱らない注意の仕方を考える。「ダメ」ばかりでなく「〇〇だったら困るけど、□□だったらいいよ」という代替案を用意する。

言葉での指示はシンプルに、かつ、具体的に。「ちゃんと座りましょう」というのは、具体的にどうしたらよいか分からない。具体的な指示とは、「数えられること・聞こえること・見えること」である。「手は両方とも膝の上に置きましょう」と伝える。

落ち着かないときは、「動く」ことも取り入れる。多動は子どもも困っている。動くことが好きな子どもには、合理的な理由を与えて、動いてもよい機会を与え、エネルギーを消費させること有効である。

Q : アスペルガー傾向の子どもへの支援

A : 優れた理解を示す部分もあるので、今日教えたことがすぐ実行されると考えがちであるが急ぐことは禁物である。課題を急かしたり、何度もやらせたりするとパニックを起こすことがある。無理をせず、ゆっくり時間をかける。

叱責は、子どもを情緒的に不安にさせる。特に大きな声や音でよりいっそう不安定になる。「だめ！」ではなく「しようね」と丁寧に説明する。

「特定のものにこだわる」「集団で遊べない」「気持ちが共有できない」などの欠点に目がいきがちであるが、できるだけ長所を探して、そこを伸ばす。いいところ探しをすると、欠点も自然と気にならなくなる。

協調性の押しつけはしない。(集団行動を避けるようになる)

その場しのぎではなく、パニックの根本的な原因を探って取り除く。

〈原因〉

- |                 |                 |
|-----------------|-----------------|
| ①指示や課題が理解できないとき | ②嫌なことをさせられたとき   |
| ③急に声をかけられたと     | ④我慢することを要求されるとき |
| ⑤急に予定が変更されたとき   | ⑥何かに過敏に反したとき    |
| ⑦過剰な働きかけがあるとき   | ⑧空腹のとき・眠いとき     |

Q : 自閉症の子どもへの支援

A : 本人の困っていることを減らす。

独特の感じ方や考え方を尊重する。

得意な方法の発見と容認。

叱るではなく説明する。

伝え方を工夫する。(具体物を見せながら話をする)

○自閉症の子どもとの接し方

- 1 一般的なルールに従わせない
- 2 言葉が分からないときは、絵や写真、図で示す
- 3 注意するときはおだやかに話す
- 4 うまくできたときはほめる
- 5 問題行動は、許容範囲を決める
- 6 話しかけられたら、静かに聞き、必要に応じて答えてあげる
- 7 文化も言葉も違う外国人に接するつもりで

Q : 軽度の知的障害の子どもへの支援

A

〈特徴〉

- ・話す力や言葉の理解、形を認識する力や状況を把握する力が弱い。
- ・思考力を必要とする遊びに取り組むのが難しい。
- ・周囲の状況が理解できないために、勝手に行動したり、乱暴だったりする。
- ・社会性に乏しい。

〈支援〉

- ・できることに目を向けて「～できる子ども」として肯定的受け止める。
- ・失敗経験を重ねがちなので、子どもの能力に合わせた活動を計画し、できる状況を設定する。
- ・実際の年齢よりも発達が遅い部分もあるが、実年齢相応に発達している部分も少なくない。精神年齢や発達年齢に応じた対応だけでなく、生活年齢相応の対応も大切である。

**Q：排せつ・排尿指導**

A：尿意、便意の機能的な部分については医療機関を受診する。

排せつ指導の基本は、尿意を感じたらトイレ（おまる）で排せつし、それ以外の場ではさせないように教えることと、お漏らしにどう対応するか、お漏らししたら気持ち悪く感じる事がポイントである。（おむつをしたままの排せつ指導は論外）

①定時排せつ指導

②排せつの要求指導：トイレに行きたい要求を言葉や身振りで示させ、その後トイレでの排せつを指導する方法。お漏らしに対しては、次回には要求するように指導する。うまくいったら大いにほめる。

便器近くで活動し、頻繁に便器での排せつを誘導する。

おまるやトイレに好きなキャラクターを置く。（トイレに行くことが楽しくなるよう）一般的な段階を踏むのではなく、本人に合った段階で指導する。家庭と同じやり方で。言葉だけでなく、絵カードが有効である。

失敗しても叱らない。失敗は誰にでもあると教え、今度はシーシーと教えてねと優しく声をかけてあげ、親の方が嫌だー、面倒くさいと思わないことが大切。「気長に外れる日を焦らずに待つことが大切。

**Q：偏食指導**

A：2歳前後の発達レベルになると、嫌いなものを食べたら好きなものが食べられるという取り引きが分かってくる。この取り引きの中で我慢する力や、楽しいことを想像する力が育つ。

味覚や嗅覚からくる感覚過敏が原因であれば、無理に直そうとしない、切り方や調理方法、味付け、盛り付けを変える、1日3回食事をとることを優先する、周りが美味しそうに食べる。

キーワードは、「楽しく・おいしく・歩み寄りができる信頼関係」。嫌いな食べ物の量を減らす、～を食べれば好物が食べられるという見通しをもたせる、調理実習を取り入れてみんなで食べる、好きなアニメのキャラクターの型抜きを活用したお弁当を作る、うまく食べたときはみんなでほめる等が考えらる。「一口食べてみようか」と思えるように「楽しく・おいしく食べましょう！」

**Q：家族支援が必要なケース**

A：保護者に伝えるべきか、園内でケース会議を開催して共通理解を図る。（保護者との信頼関係ができているかがポイント）

子どもが困っていることを具体的に分かるように伝える。例：作品を見せる  
実際に園での様子を見てもらう。

家庭での子どもの様子を聞いたり、うまくいっている方法を尋ねたりする。

「個別の指導計画」を立てて、当面の目標、支援方法を保護者と共有する。期間を設けて評価し、外部機関との連携も含めて、次の一手を検討する。

子どもが劇的に変わるかもしれない方法は  
よい言葉を笑顔でかけ続けること！